

皇道とは何か？



特240

107

非常時國民讀本

版六

社典皇



始



序

瀕死の重症患者も一滴の注射液で蘇生することがあるやうに、當下の非常時日本と朝野を擧げて叫ばるる現實日本を救ふ唯一の注射液は古來より存續する皇道の活認識とそれへの自覺である。而してそれから生まれたる組織的な實踐と合法的な運動あるのみである。左翼論陣の雄某は最近復古せる日本主義は神代以來日本に傳承された神ながらの道とは何の交渉もない近代的產物なりと稱して階級意識の赤旗をおしたるの愚擧寧ろあわれむべきである。本年初頭「墓標の代り」の一篇を故國に寄せた某老政治家は、「神ながらの道を説くといふは、文字の唇日もなかつた未開時代に復舊しる」といふ事で、そんなことをしてゐると國家は忽ち滅亡するだらうと、今に以て蠖螺的籠城主義に彷徨せるの暴言は進取民族の大侮辱でなくて何んであらう。若しこれを以て忠臣の言なりとせば思想的に破壊である。右翼熱血漢の心頭彌が上に燃え決然として上陸禁止の運動起し徹頭徹尾懲せよと叫びしは必然である。



一世を指導するに足る識見を具有しながら、皇國精神の認識不足を曝露して悔ゆる
ところ毫末もないのである。長所でもあり短所でもある英雄崇拜心理を多量にもつ國
民性は、やゝもすると所謂偉い人がおしやつたのだからと無批判に承認せんとする輕
卒者流無いではない。天下舉げて皇道精神の高調の折柄本篇の如く高遠なる「かみなが
らのみち」の基礎概念をほんの輪廓的に紹介するも憂國赤誠の奔流するところ片々た
る小冊子幾許か、多忙なる讀者或は入門者啓發の手引となるを得るならば幸である。
今や我國民は思想的基礎を確立してこの未曾有の大難局に善處しなければならぬ。
根底なくして右往左往せんかそれこそ滅亡の墓穴を辿るより外に道はない。猶筆者は
機會あらば特志研究家のために可成詳細をきはめたるものを公にしたいと思つてゐる

昭和八年五月

大阪皇典社にて
著者しるす

皇道とは何か 目次

一、非常時の日本	〔一〕
二、皇道の全貌	〔三〕
三、皇道とは何ぞや	〔六〕
四、神典の本質	〔九〕
五、天皇の御本質	〔三三〕
六、神社の本質	〔三八〕
七、皇道史觀	〔三三〕
八、皇道と各種の關係	〔三七〕
イ、皇道とマルキシズム	
ロ、皇道とファシズム	
ハ、皇道とヒットレリズム	
ニ、皇道と國際聯盟	
ホ、皇道と國體教化運動	
ヘ、皇道と軍隊	
九、大きな處女地	〔三七〕

皇道とは何か

一、非常時の日本

我々は曾つて思想困難の聲を聞かされた。歴史的に種々なる外來思想を移入してゐるが、概して國難だと上下擧つてさわぐほどの思想ではなかつた。大抵は溶解されて何時となく皇道の忠實なる奉仕者として、國民思想の傳導に當つてゐた。

労働運動盛んになつて以來プロレタリア階級の唯一の武器たるマルキシズムの尖銳的哲學は、陰に陽に金城鐵壁の皇道精神に挑戦して來たのである。彼等の革命的陰謀は嚴重なる警戒網を巧みにくりぬけて細胞組織に熱中してゐたが數次の共産黨事件として檢擧されたが容易に根絶できない。

若し昨年の滿洲事變が勃發せなかつたならば、昏睡せる思想界は愈々險惡になり、さうなれば最早舌頭思想國難でなく、眞に憂慮すべき未曾有の思想國難を持ちあげてゐたかも知れん。あの天祐

も云ふべき滿洲事變は、思想界に大變化大衝動を與えたのであつた。

腐敗絶頂に達せる既成政黨に嫌焉の情を抱ける國民は、強力内閣の出現をよろこび迎えたのである。

思想國難の聲潜晦するや、鋒先は更に轉じて日本自ら活きる道に直面したのである。國內的にも對外的にも自主的に進んで行かねばならなくなつた。

これが非常の日本である

既成政黨の唾棄すべき墮落と、政治能力の喪失を悉如せる國民が強力内閣に期待せるは、非常時の日本を背負うて、日本の眞の活くべき道に勇往邁進する方途を建ててであらう事を願つてゐたからである。

さる四月十七日齋藤首相は地方長官會議の節非常時に處する政府の大方針を指示せる訓示中に

『近時我國民の一部に矯激なる思想を抱懐しその實行運動に加はるもの少からず、然も年を追うてますます深刻化しつゝあるが如き傾向にあるは邦家のために洵に深憂に堪えぬ……、これを排撃し我國民をして矯激なる思想に迷はずりとして、固陋の偏見に囚はれず正を踏み中を執り進ましめなければならぬ』

との一節がある。最終に

『非常時局は今なほ去らず、舉國一致勇往邁進すべき時期である』

と大聲叱呼された。云ふ所の『正を踏み中を執り進ましめなければならぬ』といふものゝ内容は明言されてゐないが、六拾四議會に於いて二荒伯爵の答辯中に『建國の精神』であると云はれてゐるから、それを指呼されてゐるものと信するが、今日何人ニ雖も國民の常識として建國精神の何たるかを知らなくてはならぬ。亦知らなければ恐らく非常時の日本に處し又、打開することも勿論出来なと思ふ。本篇は此の意味で建國精神換言せば皇道の大體を執筆したものである。

二、皇道の全貌

想ふに現下に於ける皇道の發生的過程は、

- 一、マルクシズムの克服……
 - 一、皇道に基づく國策の經綸……
- である。歴史的に展望せば、明治維新の思想的根據は勤王論と王政復古の政治的實踐にあつたとは

云へ、それを助成したものは新進ブルジョア階級の財政的援助にあつた事は、明治維新史を經濟的に研究すれば、何人も肯定するに躊躇せぬであらう。明治の文化の發展は資本主義的發達の賜に外ならぬ。徳川時代に於る最下層階級たりし商工市民があらゆる階級の王座に立ち、あらゆる政治機構文化機構を支配獨占した。従て階級的性質を有せざる皇道精神も、著しく利用せられた傾向があつた。只だ辛じて明治天皇の教育勅語及御詔勅や御製に依つて純粹なる皇道の本質が傳えられたのであつた。

歐洲大亂勃發するやデモクラシー氾濫し、我が國もその渦中に投じ込まれ普通選挙施かれ、勞働者出身の代議士を議政壇上に送ることになつた。普選以前までは財閥擁護のブルジョア政黨によりて國政を左右してゐたが、普選後は勞働大衆利益獲得のために種々なるプロレタリア政黨が出現し何れもマルクスの「共產黨宣言」を標準に政綱を公表した。ブルジョア政黨の唯一の生命は「資本」である。プロレタリア政黨はブルジョア打倒の唯一の戰闘武器としてマルクスの革命的理論、レーニンの實踐的理論を掲げて闘争したのであつた。プロレタリアの闘士の中には皇國を外國流の國家に誤認し、國家死滅説を唱えて、國體變革を計畫して、一舉にして資本主義的制度を破壊せんとする者輩出した。皇國の大不祥たる共產黨事件はこの現れに外ならないのであるが、昨年の滿洲事變は、共產主義の思想に深甚なる反省考慮の好機を與え、從來懷抱せるマルクス、イデオロギーを清算して、國家

主義に轉身する者輩出し、運動方法も從來空想的な非合法的な直接行動によらずしてムツソリニのアツシスト、ヒットラーのナチスミ同一軌道をたどり、先づ政治的の廓清から社會改造へと突進せんとするものゝ如くである。

我國のファシズムの現状は、一君萬民の國體主義による資本主義的革命的急進的の遂行運動である。彼等は明治維新を回想して、錦旗革命の聖戰であると確信し社會革命の憂國志士を以て任じてゐるやうである。日和見的國體論者、小兒病的國體論者は國體尊嚴冒瀆不逞漢なりとて接近するを潔としないであらう。又、現社會制度の缺陷缺點を目撃せる者は、改造なくして眞の打開策なしと信ずるに相違ない。それが直ちにファシスト國體主義者の運動であると斷定できないが、危機に逼迫せる累卵の現状をまさしくと観てゐる者は、先づ實踐の前に、生命原理、指導原理、統制原理、組織原理として皇道の根本義を把握しなければならぬ。今や日本は刻々と何かを索めつゝある非常時に進行してゐるのである。

世界の救匡、現代皇國の救匡、皇民の救匡は正確なる皇道の認識から始まる。

三、皇道とは何ぞや

六

皇道とは我國民の生活指導原理である。この生活には精神生活と經濟生活を合一せる内容を持つてゐるところのものであつて、靈主躰從的のものではないのである。皇道は「すめらみくにのみち」或ひは「すめらみかどのみち」と稱して「かみながらのみち」の履踐實行の表現である。「かみながらのみち」を究明すれば、皇道の眞意義が理解さるゝ譯である。「かみながらのみち」は皇道の基礎であり「すめらみくにのみち」は「かみながらのみち」の歴史構成の實踐作用である。

一應こゝに「かみながらのみち」の意義を検討して置くことは、皇道の歴史的發展を知る端緒となるからである。

卅一代用明天皇以前までは「かみながらのみち」を單に「みち」と呼んでゐた。「みち」が作用化或ひは動作化することによつて、種々なる名稱が附されたやうである。三十六代孝德天皇から「かみながら」といふ語が見えてゐる。この語こそ「すめらみくにのみち」を指呼されたものであつて、「かみながらのみち」といふ熟語は餘程後世のことかと思ふ。次章にお話しするであらう。神典の一つ、

である古事記の序文に見ゆる「本教」「典教」「神理」などの語は「かみながらのみち」を現はしてゐるのであらうと思ふ。

本居宣長の「玉かつま」や、平田篤胤の「古道大意」には神々の恵に従ふやうに説かれてゐるが、それは「みち」のある一端を述べられたのであつて、詳しく云ふと、神典全體を説きあかして行かねばならぬが、試みに箇條書に記してみるに、左の如くである。

- 〔一〕 生命の無限がある。
- 〔二〕 皇國即世界である。
- 〔三〕 全一になつてゐる。
- 〔四〕 神聖が存在してゐる。
- 〔五〕 不可侵である。
- 〔六〕 世界精神を持つてゐる。
- 〔七〕 理想信仰の體驗である。
- 〔八〕 實行力がある。
- 〔九〕 敬愛心がある。

以上の九項を一括して云ふに「神そのまゝにして人爲言あげなきみち」である。これが皇道の原理である。

「すめら」は天皇を申すのである。令義解によれば「須明樂美御德」とあらん限りの美しい言葉で綴られたものであるが、それは形容詞的の意味でなく本居宣長の言の如く「眞の理にかなひて、天地

七

のかぎり、際にも横にも往通り足はして、動くことなく、變ることなき」ものにして、『かみながらのみち』の優秀なる實現者としての現人神であらせらるゝからである。

これが皇國の歴史構成の根本要素統一要素となるものである。もとゞ「すめ」の眞理の實現である。われ／＼國民の義にして、皇國統一を稱するのである。『かみながらのみち』の眞理の實現である。われ／＼國民は「かみながらのみち」を宣揚するには「すめらみことのみち」を羽翼し奉るのである。皇道を知るには、左の順序によつて研究をすゝめたならば、容易に了解せん。

(一) 神典の研究 (二) 天皇の研究

(三) 神社の研究 (四) 歴史の研究

の四方面である。神典は皇道思想を傳承せるものである。天皇は現實に於る皇國基礎である。神社は國體形式の表現である。歴史は「かみながらのみち」を根底とする『すめらみこと』の實踐窮行の活記録である。神典、天皇、神社は横からみたる皇道であり、歴史は縦からみたる皇道である。

四、神典の本質

神典に似て非なるものは古典である。今議會に於て鳩山文相は二荒伯爵に應答せられた中に「古典教育を施し、古典探究を致させて國體に關する固い信念を懐かしめるやう指導しつゝある」との言葉があつたが、古典を文字通りに解釋すれば古くから傳はつた本、換言すれば古き傳説をかきのこした記録である。ギリシヤ、ローマの傳説はさうした意味に於る事はできるであらうが、皇國の神典は古典ではない。現に活きつゝある皇國體のいのちを傳えてゐるところの活書である。生命の本である。鳩山文相の所謂「古典教育は」神典の生命教育を意味して居るものならば、より以上の満足ある答辯があつた筈でもあり、あふるゝが如き確信をどこかに見出し得た筈であらうが不幸にして吾々は見受けることが出来なかつたのである。

神典は「かみのみふみ」と云ひ、神々の「かみながらのみち」の言行録である。神典は左の七種から成り立つてゐるのである。

(一) 古事記(ふることぶみ) (二) 日本紀(やまとぶみ)

(三) 古語拾遺(こごしゆゐ) (四) 祝詞(のり)と

(五) 古風土記(こふうどき) (六) 萬葉集(まんえうしゅう)

(七) 舊事記(くじき)

(一)は「かみながらのみち」を物語化して傳えたものである。(二)は「かみながらのみち」の細部を物語風にせずして梗概風に書き傳えたものである。(三)は編者の家に傳つたものを一まとめにしたもので(一)(二)にない、物語を傳えたものである。(四)はあかき心もちて神様に申上げた祈の言葉を傳えたものである。(五)は「かみながらのみち」化せる地方の云ひ傳えをよせ集めたものである。(六)は昔ながらそのまゝにもつてゐる清き明き素直な感情を吐露せる歌をあらゆる階級層からあつめたものである。(七)は(一)(二)のある物語のたすけとなるものが、ところ／＼にのこされてゐるので、神典にならないかも知れぬが、その意味にて神典として取扱はれてゐるのである。以上七種の中で、最も大切な本は、(一)の古事記である。上中下三卷ある。上巻こそ「かみながらのみち」を傳えたものであつて大別すると、

(一) 宇宙觀 (二) 人生觀

(三) 理想觀

になつてゐる。神格本位から見ると、

(一) 天照大御神 (二) 廣義の八百萬神

の御活動である。まづ宇宙觀から見ると「いのち」が根本である。生々たるところのものである。萬我萬物森羅萬象悉く「いのち」がある。宇宙その物が「いのち」である。「いのち」は創造になつて現はれる。創造は大にして日月運行春夏秋冬晝夜交替から、小にしては人間の生死社會の變化等もみなそれである。創造はたえず動きつゝある自然であるとも云へる。創造に交渉が起る。これを化育といふ。美化しあふのである。自然物たる木に人間の創造を打ち込んで行くと、變つた形態が生じる。人間世界に於ける教育はそれである。

創造は無限である。無限を無限にあらしむるものを生成といふ。化育より比較すれば、より靈的な存在である。人間の信仰、修養、研究等がそれである。化育には有意的のものゝ人間相互の練磨がそれにあたり、無意的のもの、自然の人間教化がそれに當つてゐるやうである。以上の創造、化育、生成は「いのち」の單位である。これが無限の世界五官に超越せる世界有限の世界感覺可能の世界、無限と有限の交叉せる世界にみちてゐるのである。「いのち」の

第一原理を人間世界に於て、最も明瞭に認識せしめうるこころの働きは「有り難くなつかしみ思ふ心」である。略して敬愛心ともいふ。敬愛心は國土と民族の發生事情に依つてそれ／＼働きを異にし

てゐる。基督教はこれを「愛」と云ひ社會化した教義を立てゝゐる。儒教はこれを「孝」と云ひ家庭化した教義を立てゝゐる。神典の宇宙觀にてはこれを「忠」として、卑近なる家庭から社會國家へと自からなる發展に従つて教義が生れてゐる。

敬愛心は原則として相對的である。求めつゝある積極的動作と、求められつゝある消極的動作の歸一的結合即ち能動受動の抱合が、あらゆるものを生むのである。この宇宙觀を背景として人生觀が立つのである。神典の人生觀は共存共榮である。人は社會を離れて生存することはできない。社會を美化してゆくこれが「いのち」の必然的欲求である。共存共榮は左の五項を眼目として相互に健全なる人生觀を樹立して世界人類を指導しなければならぬ。

- (一) 清明なること。
- (二) 爽快なること。
- (三) 展眉なること。
- (四) 眞實なること。
- (五) 行履なること。

以上の五項は皇國社會を共存共榮にし、人類生活の歸趨を示すところのものである。神典の人生觀は「いのち」を實現するために實踐方法を立てたものである。神典の理想觀はやがて人生觀の表現である。「いのち」の無限的發展である。理想實現の爲に多くの困難が伴ふ。必ず實現してみせるぞとい

ふ金剛不壞の固い信條を持つて居らねばならぬ。と同時に障礙破壊の決斷的意思をきたひあげねばならぬ。

- (一) 眞 愛
- (二) 剛 毅
- (三) 明 智

の三徳を尊守し「かみながらのみち」の大理想たる「たかまのはら」をそのままにこの地上に建設するのである。神典は物語なれども言あげれば以上述べきたりし如く一貫せる筋道により、萬代不易の國基として六合に照輝やいてゐるのである。

五、天皇の御本質

もとく、天皇觀も神社觀も神典構成の主要部分なれども、神典それ自身から云へば、あらゆる生活現象を包含してゐるのであるから、皇道と最も直接なる關係を有する天皇觀と神社觀を抽出して説明するにすぎないのであつて細部の構造に到りては神典全體につきて吟味しなくてはならぬ。神ながらのいろは歌に「天皇は親まろは濠」の句があるが、多少でも皇國體に關心を持つものは、深淺の程度

はあれ、みなその考へを持つてゐるやうである。筆者はある中學卒業生に國體の骨は何か？と質問したところ答へて曰く、「天皇」しからば天皇の尊きところはと問ひつめるに「權力」と答えたので、更にこれ以外に無きやといへば「統一」と云つたが、これらは外國流の主権者の思想であつて、皇國の天皇觀は、斯の如き意味では決してない。「天皇は親」であるその親の根元たる天照大御神の「あらひとがみ」としてましますのである。

天照大御神の御神格を知り奉らねばならぬ。天照大御神は價値の根源であらせらる。神典に「御倉板擧之神」と申上げてゐる。「御倉」とは「御位」「板擧」は「種子」であつて、價値の原働者である。

憲法第三條の「天皇は神聖にして侵すべからず」の「神聖」は、御位種子之神である、神聖とは事物をねうちづけることである。事物に價値を生ぜしむるところの原動力である。神聖は神である。神なるが故にあかき真心に依て認識されうる所の崇高なる存在である。價値は尊き感じであるが、感じをうけしむるところの作用を四魂といふ。四魂とは

- (一) 和 魂……(敬愛)
- (二) 奇 魂……(統一)
- (三) 幸 魂……(彌榮)
- (四) 荒 魂……(實行)

である。價値精神である。ことばのそれにある價値であるが、形として遺したものが、三種神寶即ち

- (一) 八尺の勾玉
- (二) 八咫鏡
- (三) 叢雲劍(後には草薙劍)

である。三種神寶は皇國特有のものかと云ふに、何づれの國にても劣らぬほどに尊重してゐる、殊に支那にてはその甚しきを見るが、神聖なる價値根源として莊嚴なる念を拂つてゐるのは皇國のみである。大御言として傳えられてゐるが、「天つ日嗣彌榮の御神勅」である五段に分けるに、

- (一) 葦原千五百秋之瑞穗國は
- (二) 是吾が子孫の王たるべき地なり
- (三) 爾皇孫就てまして治ろしめし給へ
- (四) さきくまませ
- (五) 實祚の隆えまさむことは天壤のむた無窮なるべきものぞ

である。(一)は生成發達の大世界(二)は天照大御神の御本系たる邇々藝命の統治したまふ國(三)皇國の統治は邇々藝命の御直系たる、御方が代々治ろしめさる(四)彌々榮えに榮えよ(五)彌々隆昌にして絶對にやむことなし「ぞ」は永遠に皇國皇室皇民を守り榮えしめ給ふ強硬喬乎たる活指示である。天照大御神は久遠に一明のみにかゞやく高天原にましまし、高天原の「うつしくに」たる皇國に御神格そのまゝ御授けになつた。御名もそのまゝに因み奉りて天邇岐志國邇岐志天津日高子番能邇々

壽命、略して皇孫命とも申上げるその御方をおくだしになつたのである。

この間皇祖皇宗慶を積み暉を重ね、天祖御降跡以來實に一百七十九萬二千四百七十餘歳を経て、人皇第一代神武天皇の御出現となつたのである。皇統萬世一系は皇國體根本的の約束である。支那の皇帝は有徳作王主義である。帝堯の語に「克く俊徳を明にし、以て九族を親しうす。九族既に睦くして百姓を平章す。百姓昭明して萬邦を協和し、黎民於變り時雍らぐ」に依つて一般を知ることが出来る。皇國の天皇は御親ら支那の聖王の如く帝王の徳をみがき給ふも、よしさうあらせられずとも、萬世一系により萬民は服膺し奉るのである。天皇に御徳あるから國が繁榮し、しからざれば繁榮せぬなどいふことは、絶対に考へられないのである。支那は有徳作王主義なるが故に、君臣の關係は對立的であり功利的である。「三度諫めて聽かれざれば則ち去る」とか「我を撫すれば則ち后、我れを虐すれば則ち讐」「君君たらすば臣臣たらす」などの言葉は到底皇國人としては想像できないのである。西洋では主権者の命令にそむいて重刑に處せらるゝとも敢て苦痛としない聖僧さへあつた。皇國人としてはますます想像できないといふよりも寧ろ不思議である。

西洋の歴史は階級的歴史である。上世は貴族と奴隸中世は領主と農奴近世は資本家と労働者の關係であるから、國民の大部分は奴隸たる運命をまぬがれなかつた。マルクスの階級闘争史觀の發見も偶

然ではない。プロシヤのフレデリック大王の「朕は人民の從僕である」は道徳訓言としてならば批評の限りではないが唯物史觀から審判せば民衆への欺瞞であると云はねばなるまい。

皇國の臣民は、「あめのますびと」「おほみたから」の語によつて知りうるごとく、天皇をしていよく「すめらみこ」たらしめ奉る神聖なる補翼者にして日本構成の必須なる一員となつてゐる。大國主命の五期に渉る國土經營の御修養は臣民補翼の模範的典型として大成されたのである。

御親ら神社奉祀の神祇たらんことを最高の念願とし給へる大國主命は微塵も奴隸意識なく、正々堂々と補翼の道貫徹されたのである。誤れる徳川將軍政治が士農工商といふ社會階級を甄別し大儒貝原益軒や荻生徂徠等に階級的イデオロギーの訓言製作せしめて盛んに教化した結果奴隸が上代からあるかの如くに錯認せらるやうになつたのである。補翼者たる臣民は「神の御末我、神の御子我、神ながら我」である。

天照大御神の御末おながれである。雄略天皇の御遺詔に「義は乃ち君臣、情は父子を兼ね」との御意はもとく支那帝王の言葉を採用せられたとは云へ、大御心のありしところは所謂「一氏蕃息して更に萬姓と爲れるもの」を大元させる御諭言であることは申すまでもないことである。

六、神社の本質

神社は皇國體の縮圖である。生命を表現せる活形式である。無窮追進の姿である。神典の示す所に依れば神社の原型は、神典の人生觀を一堂に集約せるかに見える天之岩戸がくれの件にある『天香山の五百津眞榮木』である。神社の設備としての云ひ傳へに「……眞賢木を、根許士爾許士で、上枝に、八尺勾是之五百津之御統之珠を取り著け、中枝に、八尺鏡を取り繫け、下枝に、白丹寸青丹寸手を取り垂で、此の種々の物は、布刀王命、太刀御幣帛と、取り持たして、天兒屋命、布刀詔戸言祈ぎ白して」とある。

これに依つてこれを觀るに神社は神靈の奉安所にして、あかき心を捧呈して祭祀を行ふところの聖域である。『みたましづめ』する靈域である。皇國體發達を念願とする實修道場である。従つて建造物が主でなくて、どこまでも奉安の神靈が主である。「かみながらのみち」の生命の出づるところである。高皇產靈尊の祭祀國基の御神勅の「天津神籬」は五百津眞榮木であり「天津磐境」は奉安せる境内を仰せになつてゐるのである。

延喜の御代まで全國に參千壹百參拾貳座あつたが、昭和四年の調査に依れば拾壹萬壹千八百九拾七

社の數に及んでゐる。大正九年の調査からみると參千六百拾貳社廢止合併されてゐる。この驚く可き激減數は、神務當事者の怠慢か、國民の敬神崇祖の衰亡か、將又經營難か何れにしても寒心すべき事實である。神社を建設して神靈奉祀するといふことは「みこと」たる皇民のあかき、なほき、まことこの要求である。反宗教闘争論者は資本主義の貨幣を神位にまつりあげたものにすぎないので、資本主義的制度が辨證法的に止揚し揚棄されたならば、ひとたまりもなく滅亡し人類の世界から宗教は完全に驅逐されるこいふやうな樂觀說に陶醉してゐるが、皮肉にもソヴェートロシヤではレーニン廟を立てるや赤い國民はそこにお參して盛んに默禱をさゝげてゐるではないか。

反宗教闘争は資本主義觀念型態への爆彈であつて、人間の魂にやどつてゐる「まつる」至情までたゞきこはせるものではない。最近アメリカでは各種の紀念會館を神社化せんとするの風潮盛んなりといふことである。

徒らに基督教のドラマに囚はれてゐた愚さをさとり、人間本有の至誠に出でやうこしてゐるのである。

神社經營の主體は氏子である。神社は不動のものである。不動なるが故益々ねうちがあるのである。氏子には移動性がある。殊に都會生活盛んになるにつれて、移動がいよ／＼頻繁にならざるを得な

い。従つて氏子としての神社奉仕にも感情上種々なる變化が起るが、これは皇國體意識を以て臨めば解決がつく。

そも、神社は國體の表現であつて、皇民として何神社を問はず奉任の義務をつくす事は當然である。地方的愛郷心に問はるべきものでなく、皇國體本義にてらして神社に奉仕しなければならぬのである。折々氏子納金をとかく云ふ者あるをきくが、これは全く皇國體の立場を知らないからである。神社に非らざれども、神社に似てゐるものに神棚がある。家庭に於ける神靈奉安所である神社を親とすれば神棚は子にあたる。それ故に「彦社」ともいふ。神典にてらして思ふに神棚祭祀發達して徐々に神社形式が生じたのであらう。神棚といふ語と天津神籙とは同一内容を持つてゐる。天皇御本質の中軸骨隨たる御位種子之神を表現せる珠は、神棚に安置されたのである。時にきくに伊勢參宮參拜著しく増えし結果として神棚奉齋が盛んになつたといふことであるが、全世相を望觀せば決して悦ぶ可き状態にまで到達してゐないのである。

明治初年以來教會神道が起り年々歳々加速度の勢ひを以て發達しつゝある。試みにその統計を見れば如何に教會神道が國家的に社會的に重要な役割を演じつゝあるかと察せられるであらう。

大正九年度	教會數	教師數	信徒數
	七、五三六	七三、七九四	一〇、〇〇四、〇五〇
昭和四年度	一三、四九八	一〇〇、三五六	一七、四八五、六三三
増	六、四三二	二七、五六四	七、四八一、五七二

教會神道には

- (一) 國體的神道(教義本位のもの)
- (二) 神祇的神道(神靈本位のもの)
- (三) 人道的神道(教祖本位のもの)

の三種に區別するこゝが出来るが、教會内に於ける神事方法は大同小異である。素々神社にてなさるべき業態なるも、神社は宗教に非らずとの見解の許に人心教化の埒外に置去りにされて専ら祭事に奉仕することになつた。教會神道は正面から佛教基督教と對抗しつゝ「かみながらのみち」に存する宗教的方面を擴大強化に努めたのである。

神社の側からみれば教會神道はすくなからず害を興えてゐるかに見受けらるゝが教會神道側から云へば相當に功獻してゐると云ひうる點相當にあるのである。

佛教に於ける寺院、基督教に於ける教會には歴史的に哲理的社會的に根據をもつてゐるが教會神道は現代的産物だけに、この點寂寞の觀でないが、半世紀に亘る國家社會功業を回想すれば「かみながらのみち」の新生面を開拓したのであつた。教會神道の方向が世界化せりと雖も、皇國體發揚の任務に於ても、佛基に劣ることは斷じてない。

佛教は本來超世間的宗教であるが、完全に「かみながらのみち」に去勢されてゐるから、まがりなりにでも皇國體宣揚に奉仕するであらう。獨り基督教のみが外國にいふ祖國を後楯にとつて、イエスキリストの非國家思想の傳播にとめるであらうが、外國にてはブルジョアジーの御用宗教として奉仕してゐるから虎視眈々たるプロレタリアの攻勢をおそれてゐる。

この影響は日本の基督教にも侵潤してゐる。従つて全然相反する「かみながらのみち」の袖にかくれて、おとなしく教勢網をひろげつゝあるかに見える。基督教は現今の社會狀勢に迎合してゐるものと教義その者がプロレタリア思想であるから、だしぬけに反逆してゆくだけの用意は持つてゐる。神本質とは餘事ではあるが、一寸参考まで管見を述べて置いた。

七、皇道史觀

皇國の歴史は「かみなからのみち」の皇道史である。天皇を根元とする國家といふ大生命の歴史である。神典眞理の向上發展の歴史である。神典延長の歴史である。神典を史眼的にみれば世界史的否宇宙史的性質をもつてゐるのである。地上的の約束、地域的約束に拘束されて、神典の心を永遠に傳承するに最も好適地たる皇國にのこされたのである。

「朝日の直刺す國夕日の日照る國なり故此地ぞ甚吉地」云々「甚吉地」の語の裏には神典の眞理を地上的に發育せしめるに最理想の地であるといふ深義を強く語つてゐるのであるまいかと思ふ。神典の廣さより以てすればより著しく限定されたる皇國歴史を事實につきて政治史的に區分せば天皇親政時代、氏族政治時代、公家政治時代、武家政治時代の變遷を通過してきたのであつた。

亦經濟史的に分界せば奴隸經濟時代、莊園經濟時代、貨幣經濟時代の變化があつたが各時代に一貫して動かぬものは御位種子之神たる價值換言せば天つ日嗣萬世一系の皇位であつた。皇位が種々なる事態に直面して、表面化されたり、潜在化されたりして「かみながらのみち」の歴史は創造化育成されて行つたのである。

由來皇道には革命思想なし、又あるべき筈がない。そも革命は主権者の地位を剝奪することである。天命にかりて被支配者が動物の皮を剥ぎとりなほあきたらでその毛をむしりるといふ峻酷な態度で敢行するのである。支那は國初の第一頁から禪讓放伐易姓革命の道をたどつてゐるから敢て不思議とせざる所、孟子ですら何等憶する所なく「一夫の紂を誅するを聞く、未だ君を弑するを聞かざるなり」と吐いてゐる。

ヨーロッパの國家は近世的產物——資本主義の海外的發達から促進された國家、一名警察國家と呼ばれてゐる程に國家的權力の行使要求から生まれ國家萬能主義で、列國は富の招致に全力を竭くしたのである。

機械的なる國家組織であるだけに、主権者の道徳は支那程に強國でない。従つて主権者が屢々民衆の前にて慘酷な刑罰を課せられてゐるが正當なる行爲として認めてゐるのである。ロシアの革命、ドイツのカイゼルの幽閉を見て充分に承認する事が出来る。

「皇道」が政治的に發動せば維新となつて面目を一新するのである。三千年の歴史の中に、五大維新と稱すべき大事件があつた。即ち

- (一) 神武天皇の御東幸
- (二) 大化の革新

- (三) 鎌倉幕府
- (四) 徳川幕府

(五) 明治維新

である。ごく簡単に説明せば(一)は皇國全土に「かみながらのみち」を教化布教のために、敬愛發現の最少限度の手段として威力を示すに足る軍事行動に依り著々發揮されたのであつた。神典理想誘導のために異人種に慈愛の矛を向けられたのであつた。神武天皇の「天業を恢弘天の下に光宅る」。云々の御勅は皇道の顯揚を宣明された御言葉であると云はねばならぬ。

(二)は氏族制度の弊害を爰除して國家を統一し唐制の班田法に則りて、私有財産の分配を平均にし政治的にも八省百官を設けて、任官は専ら人材主義によつた。改革の當事者たる中臣鎌足等は神祇奉仕者の家柄なりしも、儒教を學んでゐただけに「かみながらのみち」に透徹せる理解を有つことが出来なかつた。幸ひ蘇我石川麻呂の皇國精神は中大見皇子の御心を動し奉ることが出来たのである。これが大化の革新の原動力となつたのである。

(三)は皇國體上變則政治なれども、平安朝末期の政治的頹廢を革正して、武士道と呼ぶべき新しき精神を創造した。天皇の神聖のある部分を民衆化した。皇國精神の自覺の端緒になつたことを忘れてはならぬ。それは皇國最初の國難ともいふべき弘安四年蒙古の來襲によくあたり得たるもこの賜に

外ならぬのである。殊にこの時代にはふしぎにも多くの宗教改革者が出現した。悉く國家主義による新佛教の宣傳であつた。天皇の尊嚴を最も弘通力の強かつた佛教の上にのばされてあらゆる階級に普及されたのであつた。

(四)は外來の天主教排撃のために鎖國政策をとつたのである。鎌倉時代に創作された現實的皇國精神を一層に訓練し修得する長き期間として與えられたのであつた。更に江戸幕府の創建者徳川家康は天皇統治の政治的實權預りしとは云へ不減なる天皇神聖をどうすることもできないといふよりも、渠の有する皇國精神がそこまで壟斷することは出来なかつた。又徳川時代の儒學勃興は、やがて民間からは古學復興となつて學問的に「皇道」が研究せられ、徐々に實踐運動としての勤王論が起り天皇神聖が明瞭に認識されて來たのであつた。

(五)はかくして生れて來たのである。皇政復古は「かみながらのみち」の全面化を企圖したものである。明治維新の五箇條の御誓文はその第一聲と申すべきものである。

神典を國として、内外的に普く及ぼされ、ねむれる獅子島國日本は世界に大飛躍したのであつた。皇道史觀を中心として三千年の歴史は動いてゐるのである。即ち天皇神聖が直聖が直接或いは間接に發動して歴史は轉向して次代への用意として進行してゐるのである。

八、皇道と各種の關係

イ、皇道とマルキシズム

皇道は皇國の原始的思想でない。歴史構成の原素として時間的に發展してゐるのである。表面に露出する皇道には、時代的解釋に依つて多角的な理論を生み出だしてゐるが、「かみながらのみち」はことあげでなくて一貫せる事實として表出してゐるのである。

マルキシズムは資本主義的社會が生み出した次代へ躍りこませる革命理論である。マルキシズムの根幹をなす唯物史觀、労働價值説、剩餘價值説、階級闘争説、資本集中説、資本主義倒壊説等の學説は一つとして皇道とは一致しない。けれ共資本主義的社會が最後の段階に到達するまではマルクス理論は修正、訂正、改造、歪曲さるゝ運命に衝突すると、全然影を没してしまふやうな事はないであらう。皇國の現社會も資本主義的制度を持続してゐる限りマルキシズムの砲彈を覺悟しなければならぬ。

共産黨の陰謀は今後とても屢々繰返さるゝのおそれはない。「かみながらのみち」は素より理論ではないが、マルキシズム克服のために科學的理論を建設して、皇道凱歌の日を促進せしめなけ

ればならない。

ロ、皇道ニファシズム

ファシズムは歐洲大戦後イタリイが、今にも社會革命勃發せられんミする危機の情勢に在つた時電光石火の如く急激に勃興した思想である。一種の反動的な國粹主義である。従つてファシズムには高遠なる理論はない。ファシズムの首領ベトニー、ムツソリニは三大信條としてその一に曰く「吾等の精神は祖國、本分、規則」こゝに云ふ祖國ニは國民主義的の國家である。國王の存在は軽い意味に認められてゐる。曾て現皇帝陛下がミラノへ行幸の際ファシズムの一派は防害こそせされ熱狂的歡迎はしなかつた。寧ろ「ファシスト、寡頭政治」の標語を高らかに掲げた位である。

共和主義的假面をかぶれる獨裁政治である。今日のイタリイの社會政策は國家社會主義に基いてゐるのである。ファシズムは各國に蔓延して共產黨に對して一敵國の觀がある。皇國にも尠からずこの潮流が思想方面に傳播して、極右翼の國粹國體は一君萬民の大日本主義を奉じて資本主義的制度に鋭いメスを振りむけてゐる。

皇道はファシスト化するゝ傾向なしとしないが、ファシストでない。

ファシストは西洋流の國家主義であるが、皇道は世界精神たる皇國主義である。今後のファシストには可也の變化あることを豫想し得る。要するに資本主義末期の悲鳴を救済せんとする簡易なる手術としての思想である。

皇道はファシストに超越して皇道の本義に立ちて、資本主義の重症を治療しなければならぬ。

ハ、皇道ニヒットレリズム

ドイツのファシスト、『逆十字』の偉觀ゲルマニズムの權現——あらゆる階級層から救世主として歡呼と禮讚の花束を捧ぐるに吝ならざるアドルフ、ヒットラーの國粹的社會主義運動は最高潮に達し、竟に政治的に獨裁制を確立し、經濟的には産業及び金融統制權を掌握し今や文化指導權をも掌握せんとして非ドイツ的圖書撲滅のため假藉なく沒收焼却を斷行しヒルシエワエルト博士の性科學資料を占領せる黨員等は『ドイツの乙女、ドイツの婦人はわれ等が庇護の下に』の歌を高唱して引上げたといふ。

遺憾なく始皇帝式赤裸々に發揮し「ナチスの大暴壓」として世界を震撼させたのであつた。意想外のニュースに驚愕したある新聞の如きは「抑もドイツ國民が各國民から尊敬され恐れられてゐるのは、

この種の秀でたる學者、詩人等の存在せるがためである。アインスタイン氏やハーバー氏の存在は百人のヒットラーにも勝りて世界的にドイツの偉大さを高めたのである」とヒットラーの焚書行動をこよなく憎嫉した。彼が提唱する『第三國家』出現のためには一切の犠牲を拂つてユダヤ網排撃に致々汲々として寧日なき有様である彼の第三國家は素よりイブセンの靈肉合一の理想主義的國家でなく、政治的な現實招來の國家社會主義である。ゲルマニスムスの新國家建設の促進は只偏へにユダヤ民族排撃にあると信じてゐる。ヒットラーは曾ては建築労働者であり労働争議の経験も少々は持つてゐたので直ちにマルキシズムに感染すると思ひの外、意外にもマルキシズムは人類文明を毒殺する毒瓦斯である事を看破したのであつた。

彼が統率せる國粹社會黨支持者の中には廢帝ウイルヘルム二世がゐる。昨年四月總選挙の際皇太子自ら『我々の同志はヒットラーに投票せよ』と推挙するを惜しまなかつた、又第六皇子はヒットラーの後に跟いて政談演說會に出席したのであつた。フランクフルト、A、Mの『フォルクスシユチメ』紙は、早くもこの間のデリケートな消息を傳へて曰く、ある密約の存在ありと新國家建設の暗示を語つてゐるに外ならないと想像される、イタリーは皇帝治下に於けるファシズムである。ドイツは大統領治下に於けるファシズムであるだけに、二重の目的が暗々裡に交錯してゐるかに見える。即ち主權者

確立の上に築かれんとする獨逸民族の社會國家である。それ故ドイツ文化革命運動としてユダヤ人を網羅せるプロイセン藝文翰林院に大彈壓を下したのであつた。局外者たる日本の新聞でさへ破壊的な非業を鳴らしたが、ナチス運動としては勢ひそこに到ることは當然云はねばならない。

昭和×年×月×日の帝都に於けるファシスト、テーゼによるクーデターはナチスの傾向が著しく伏在してゐたかと考へる。ヒットラーは何處迄もドイツ民族たるを天性から自覺してゐた。マルキスト否定もそこに根ざしてゐたのである。

皇道の國大和民族も『われもまた高産靈の末なればその中程はとも角にも』の歌の如く、洩れなく天照大御神のお流れ天皇の御末である。生まれながらにして皇道の何物たるかを知つてゐるのである。皇道は理論的體系的に組織づけることができるとしても素々活事實である。日本のマルキストはもう好い加減に回心して皇道主義實踐者として天皇補翼の聖業を完成すべきである。ヒットラーの思想的根據に何程かの我々に教訓するものが含んでゐることを看過してはならない。

カイゼル治下當時の國家は學問的國家であるを稱せられてゐた。それにひき較べてヒットラーの第三國家は實踐的に建設されんとしてゐるのだ。帝王制、果して復活するかどうか今後の推移に俟たねばならぬ。かれの政治型態の集中化、獨裁化は聽て昔日華やかなりし王冠のかゞやきをみせることで

あらうが、若しこの期待が裏切られざりせば世界思潮は旋風の如き大變化をもたらすであらう。皇國はあらゆる民主的國家から世界最高の指導者として君臨せんことを冀望するであること豫想せしめるに難くない。

二、皇道と國際聯盟

本篇の序文にも一寸觸れて置いた「墓標の代りに」の筆者は「昭和維新の最大方針は、國家主義の代りに、國際主義を高調する事であらねばならぬ」と云ひ又「現に國家主義の本家本元たる獨逸二國の帝室は滅亡し、比較的國際主義者の多い英國の帝室が、安泰なのは何よりの證據だらう」と皮相の見解を標に上げて堂々と國際聯盟時代を謳歌して、「世界聯邦を形成すべき要素を備へて居る」と理論の立つたやうな口吻をもらしてゐるが、國際聯盟の氣息奄々たる事實や如何にだ。

國際聯盟に道德的良心があるならば、第十五條第四項を含む報告案に對して四十二對一票といふ不公平の限りをつくした採決はなかつた筈だ。日本の聯盟脱退は餘りに當然な成行である。

昭和八年三月廿七日御煥發になつた御詔書に「國際聯盟ノ成立スルヤ皇考之ヲ憚ヒテ帝國ノ參加ヲ命シタマヒ朕亦遺緒ヲ繼承シテ苟モ懈ラス前後十有三年其ノ協力ニ終始セリ」

終始「かみながらのみち」の正義を以て國際親善協調に臨んだのであつた。皇國天皇の御本質に盲目なる無智なる没批判なる聯盟諸國は滿洲國承認問題に直面するや認識不足の杜撰きはまれるリツト報告案を楯に竟に「朕乃チ政府ヲシテ慎重審議遂ニ聯盟ヲ離脱スルノ措置ヲ採ラシムルニ至レリ」との御聖旨になりしとは云へ、天皇の有り難く懐しき思ふ大御心は「國際平和ノ確立ハ朕常ニ之ヲ冀求シテ止マス是ヲ以テ平和各般ノ企圖ハ向後亦協力シテ渝ルコトナシ」

崇高にして優渥なる御軫念を拜し奉て加盟國は速かに後悔すべきである。聯盟脱退後の列國の影響を軍事專問通の云ふ所をきけば英國は米國の方針に迎合し、米國は聯盟の強硬なる態度を歡迎してゐるやうだ。又、米國側は皇國の東洋政策は武力干涉のほか何物も効果なしと觀取してゐるから、日米對立の肉迫は何時どんな風に勃發するかも知れない、ドイツは今回の聯盟の態度に讓歩するとしても日本の大膽にして且つ斷乎たる決死的外交戰に苦手嫉妬感じたらしく聊か反日氣分を抱いてゐる。

イタリーは日本の脱退に刺戟されて、アルパニヤ問題で聯盟に對する熱度著しく減殺されてゐると報じられてゐる。當下の國際聯盟の大勢は故ハーディングが「國際聯盟死せり」の極言正に適中せんとしてゐる。

顧みれば國際聯盟の歴史はナポレオン没落後一八一五年ウイン會議を境として發達の第一歩に入り

一九一八年パリ平和會議開催され史上未曾有の國際聯盟は成立したのであつた。

平和向上戦争防止を旨とする國際社會はカントの『恒久平和論』の如く、單なる架空的理想論にすぎ
まり實踐的には崩壊作用を描きつゝあるものゝ如くである。

皇國は光榮ある唯一の孤立國となつた、自主的に世界地上に追進すべく運命に恵まれたのである。
この秋に當つて皇國の民は松岡全權歸朝の際メツセーヂを寄せた語の中に屢々國民精神作興を操返さ
れたことを忘れてはならぬ。すめらみことをあなゝひたすけ奉る御民我等深く深く『かみながらのみ
ち』を體認して、世界的に一大傳導を試み、國際聯盟以上のある物の、存在を知らねばならぬ。

ヒットラーはナチス宣傳機關として「宣傳省」を新設せるニユースがあつた。皇國も「かみながら
のみち」を宣揚すべく新しい宣傳機關を設置して世界人類にアツピールすべき時である。「かみなが
らのみち」こそ「中外ニ施シテ悖ラ」ざる千古不磨の眞理の道ではないか。

ホ、皇道と國體教化運動

皇道の國に國民の國體教化運動の存在は、何等不思議ではないが、思想的分野を一瞥せば宛然封建
的に割據してゐるのである。餘りに觀念的あそびに耽樂してゐないだらうか。皇國の客觀的狀勢は最

早あそびの餘暇を寸毫も與えてゐないのである。今以て國體理論の統一なきこゝは甚だ遺憾である。
徳川時代にはそれが整然としてゐたので、徳川幕府の御用學問たる儒學を征服することが出来たの
である。今日は自己免許、自己満足の國體論にあまんじ、現に動きつゝある皇國體と何等關係なき有
様である。いくら打つても叩いても響に應ぜざる空虚の説に酔ふてゐるのである。精銳なる理論創設
のために一應各自の有する主義主張をかなぐり捨て、現社會に適應する思想體系を組織しなければな
らぬ。これぞ刻下の最大急務である。

へ、皇道と軍隊

現代の皇道は言あげ無用の軍隊によつて發揚されたる功績まことに偉大である。宣揚を嚴禁された
る明治の神社制度は實に軍人の敬神崇祖に依つて何程輝かされたか知れない。皇國の軍人は、天皇の
軍人である。「軍人に賜りたる勅諭」の中に「夫れ兵馬の大權は朕が統ふる所なれば」この仰せによ
つても統帥の大權那邊にあるや自ら解る筈である。國民の三大義務として兵役に服するの義務を課
せられてあるが、そも／＼軍隊教育は天皇補翼の道を実習するためにある期間内に修養するのである。
軍務にありて「かみながらのみち」を骨子とせる五ヶ條の訓戒「天地の公道、人倫の常經」として實踐

履行し他日國民として天皇補翼にあやまちなきを期するのである。

外國人は皇國を好戰國民のやうに觀察してゐるが、先づ軍人の御勅諭を見るに、皇國の軍人は國家を保護して、皇祖皇宗の御恩顧に報い奉るにあるとの御仰せである。

干戈を交ゆると雖もやむなく應ずるのである。水野廣徳氏の『此一戰』に見えてゐる語に「兵は凶器なり。天道之を惡むも、已むを得ずして之を用ふるは、是れ天道なりと。明治三十七年二月、我が帝國は東洋永遠の平和を維持するため、茲に已むを得ずして兵を起し、露國に向つて、戰を宣した

日獨戰爭。滿洲事變。上海事變この如くにして起されたのである。

天祐のまに／＼勝利を博したといふことは決して偶然でない、かのアメリカは千七百七十五年獨立して以來今世紀まで戰ふこと實に八千六百回である。大戰二回中戰六回小戰百拾四回に及んでゐるのである。平和主義カモフラージュの中に好戰主義の毒牙をみがいて飽くなき領土侵略慾をみたしてゐたのであつた。

皇國は本來「うらやすくに」にはあれど、かくあらしめるために兵馬の道があるのである。「くわしほこちたるのくに」と呼ぶ所以はそこにあるのである。

皇國はアメリカの様に體裁のいゝ平和主義を唱えない、インチキは神洲君子國のとらざるところである。さりながら戦ひにいとまれたならばどこまでも戦に應じて雄々しく勝敗を決しやう。とは云へ神のつくりたまへる敬愛のみちは、戦のさなかにありともつくして行くぞ。これが軍人の「かみながらのみち」である。

八、大きな處女地

今日の皇國よりも、今後の皇國はどこにめざして行くのであらう。世界の思想は五つに對立してゐる。

- 一、ロシヤ……………ソヴェートニズム
 - 二、イタリ―……………ファシズム
 - 三、アメリカ……………資本主義アメリカニズム
 - 四、ユダヤ人……………シオンニズム
 - 五、皇 國……………皇 道（かみながらみち）
- ソヴェートニズムやファシズムは建設の途上にあり、アメリカニズムは没落の途上にあり、シオン

ニズムは潜行艇のごとく攪亂に微笑してゐる。目下パニックに呻吟してゐるアメリカの金剛界は彼の魔術の良にかゝつたのだ。獨り「皇道」のみ何者にも犯さるゝことなく、獨自の天地を開拓すべく東方の一角から徐々に地球の中心舞臺に現はれて來たのである。

あらゆる思潮は「皇道」に跪坐すべく待つてゐるのである。世界に一つの大きな處女地がのこされてゐるのである。それは世界を一丸とする「皇道」の社會建設である。非常時の日本に來たるべき次の日本は、正しく處女地におろすべき大きな氣吹きでなければならぬ。今やこの巨大なる意氣込を要求されてゐる我等である。こゝを自覺せねばならぬ。

皇國精神の涵養、皇國精神の信仰實習を積極的に體驗しなければならぬ。非常時の時代であることをよく悟得しなければならぬ。(了)

【不許複製】

昭和八年五月二十日印刷
昭和八年五月廿三日發行

大阪皇典社編

大阪市西區南堀江通一ノ四二

編輯兼發行 藤井稔也

大阪市此花區中江町三〇

新興日本社印刷部

印刷者及印刷所 重政重職

皇道とは何か

定價 十 錢

大阪市西區木綿橋西

發行所 大阪皇典社

振替大阪四七三八番

大阪 皇典社の新刊

皇典社 編典	文野河博 三省著	同	高野義 太郎著
皇道とは何か？	我が國體と神社	神道とお墓	日本祀職史
一部拾 送料二 錢	多數割引 一部五 送料二 錢	既刊 定價一圓二十錢 送料十 錢	限定版四八〇冊 定價金五 圓 送料二十四錢

終

